

NEWSLETTER No.99 ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music January 31, 2017

一般社団法人 東洋音楽学会 会報 第99号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
E-mail: LEN03210@nifty.com ホームページ: http://tog.a.la9.jp

目次

会長就任のご挨拶	1	ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ	10
第67回大会レポート	1	IMS2017 東京大会のお知らせ	10
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	8	会員異動	10
臨時理事会議決事項のお知らせ	8	図書・資料等の受贈	12
会員の受賞	9	新刊書籍	13
第34回田邊尚雄賞アンケートのお願い	9	新発売視聴覚資料	14
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ	9	編集後記	14
東日本支部からのお知らせ	9	第5回定時社員総会議事録(抄)・添付書類	15
沖縄支部からのお知らせ	10		

会長就任のご挨拶

遠藤徹

このたびの役員改選で会長に就任致しました。身に余る重責ですが、できることから取り組んでいく所存です。2年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本学会は昭和11年(1936)に、大学を卒業したばかりの岸辺成雄(当時24歳)、飯田忠純(当時38歳)両氏の発案と、それに呼応した「同好の士」によって8名で発足しました。当初のメンバーの共通の夢は西洋には無い新たな東洋の音楽学の建設にありました。同好の士は徐々に増え、昭和30、40年代の急速な成長を経て、近年は減少傾向にあるとはいえ、会員600名を有する学術団体になっています。80年を経て環境は大きく変わりましたが、日本発の独自の音楽学建設の志は今日なお継承していきたいものです。

学の建設という少し大仰に思えてしまうかも知れませんが、その基本はあくまで個々(個人、共同は問わず)の自由な発想による研究の中にあると思います。ただ個々の関心や興味に始まる研究が、個々の内に止まらずに、学会という公の場で発表することを通じて、発表者と聴き手(あるいは書き手と読み手)の間に相互作用や連鎖を生み、その事実の積み重ねが時間をかけて一個の学を構築していくことは、本

学会80年の営みが教えてくれるところです。

深みのある学を作るには、様々な個性を持つ同好の士が数多く集うこと、良質の発表の場を用意すること、そしてそれらを持続することが不可欠です。学会の存在意義はそこにあり、例会、大会、機関誌、会報、支部だより・支部通信等々、学会の一つ一つの活動がその基礎となります。本学会の原点やこれまでの歩みを今一度振り返りつつ、東洋音楽学会が会員の皆様にとって魅力ある研究の場として持続し、かつ一層の展開をしていくよう、微力を尽くす所存です。

なお、今期の喫緊の課題としては、立ち遅れているウェブサイトの実質やメール配信の環境整備等にも力を入れていきたいと考えています。

第67回大会レポート

(2016年11月5～6日 放送大学東京文京学習センター)

第1日(11月5日)

◇公開講演会「学会80年の歩みを振り返る」

遠藤徹 (東京学芸大学)

田中多佳子 (京都教育大学)

特別展示「学会80年の歩みを振り返る」

本学会が創立80周年を迎えて企画された講演と展示である。その意図は、講演者によるプログラム4ページの文章に明快に述べられている。すなわち、発足当時のことを自己の経験として語ることでできる者は会員の中に一人もおらず、昭和11年の学会創立はもはや歴史の問題になった。20年後の学会創立100周年の折には、創立以来の学会史を総力をあげて編纂することが学会の責務であり、その糸口となすべくこの講演と展示を企画担当した、というものである。

講演では、まず田中氏から、1年前にその実施が理事会の方針とされ、以前から資料を収集整備していた遠藤氏に田中氏が加って2理事が担当することになったこと、田中氏は展示のために事務所に段ボール詰めの形で保管されている諸資料の内容確認から始めたが、作業を進めながらいろいろ考えさせられることが多かった、などのことが述べられた。

ついで遠藤氏によって学会が辿ってきた道が、配布資料によりつつ跡づけられた。それは単なる年代記とはまったく異なるもので、学会発足の辞や「東洋音楽研究」創刊の辞に表明されている理念を厳密に検討分析したあと、近世以来の楽律研究や明治期における「東洋史」の成立、海外での実地調査の蓄積、それに欧米での比較音楽学の発祥などを受けての発足だったことを明確にした。さらに講演は、戦中の休会から戦後の再開へと進み、戦後の活動にまで及ぶ。それが比較的簡略だったのは、限られた時間であれば、やむをえないことだった。無駄な話は、まったくなかったのである。

展示は講演会場前のロビーで、2日にわたって行われた。内容は、東洋音楽研究全81号や東洋音楽選書全12冊、第5回以降の大会プログラム、それにさまざまな資料を集めて作られた15枚のパネルなどで、第33回と37回大会の公開講演会の録音を聞くこともできた。録音を収めたパソコンを利用したスライドショーも参観者の目を楽しませたが、これは配布された展示目録には記載されていなかった。聞くところによると、田中氏が間際になって思いたち、当日朝に完成させたのだという。

担当した両氏に対して敬意と謝意を申し述べるとともに、100年史編纂に向けて新理事会に確実に引きつがれることを強く期待する。
蒲生郷昭

◇シンポジウム「東洋音楽学会と柴田南雄—学会創立80周年と柴田南雄生誕100周年にあたり—」

パネリスト： 徳丸吉彦（聖徳大学）
澤田篤子（洗足学園音楽大学）
永原恵三（お茶の水女子大学）（兼司会）

シンポジウムの目的は、学会の節目である80周年と、日本の代表的作曲家である柴田南雄の生誕100周年・没後20周年との接点を考え、学会の外からの学術活動への貢献につ

いて、また、それによる音楽学の展開を検討することであった。柴田と深い縁で結ばれた3名のパネリストが、柴田と自らの接点を振り返り、学会との関係において、音楽研究との関係において、柴田の功績と思い出を語り合った。

永原は「東洋音楽学会と柴田南雄の接点」をテーマに、柴田による本学会の外からの学術的貢献の意義を唱えた。岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』の編集委員（6名）への柴田の参加が講座に豊かなバランスを生み出したこと、1990年のSIMS大阪で「シアターピース」3作品の演奏を通じ、日本・東洋・諸民族の音楽が学術研究と演奏実践の両面で接点を持ち、音楽の知が世界に発信された意義、1973年の《追分節考》以後に柴田が日本の素材の使用とその理論化に傾注した背景と特色について。

柴田の門人である澤田は、「柴田南雄と伝統 音構造分析と音楽教育への提言」と題し、柴田が常に伝統の見直しを模索する中で、日本音楽の音構造分析法として構造模式図である「骸骨図」を編み出したことの貢献、さらに音楽教育に向けられた貢献について。

柴田から放送大学の講座を継承した徳丸は、化学者であった柴田の父と田邊尚雄との接点等の幅広い人脈をひもとき、放送大学講座創設の秘話等を交えて経歴を振り返りながら、柴田の思想の特色と人間性を熱く語った。中心と周縁の差別をしない空間意識、古代が現代に反映するという時間意識、文化を「動き」で捉え（あだ名は「動く人」）、世界の中で日本を捉える意識、柴田が大切に育んだこうした意識は、今後多くの研究者と音楽実践に携わる者によって継承されていくに違いない。
竹内有一



◇公開演奏会（柴田南雄生誕100周年）

柴田南雄作品
《熊野へ参らむと》 no.78 箏・歌：米川敏子
《遠野遠音》 no.106
合唱：お茶の水女子大学音楽科卒業生有志

コール淡水・東京

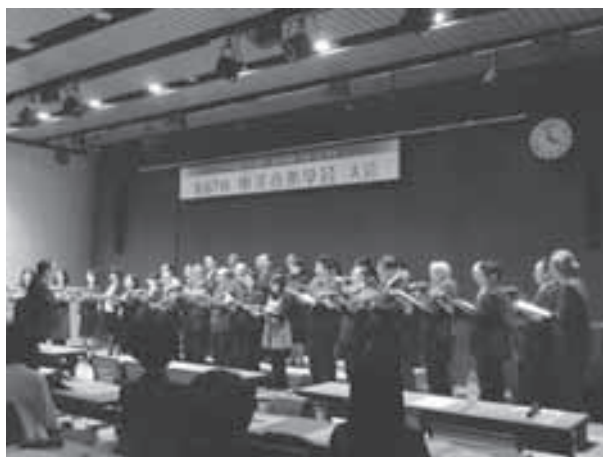
指揮：永原恵三

シンポジウムに引き続き、公開演奏会では、生誕100周年を記念して、柴田南雄の作品《熊野へ参らむと》no.78と《遠野遠音》no.106の2曲が演奏された。

《熊野へ参らむと》は、1983年に友瀧のりえの委嘱で、『梁塵秘抄』に基づいた入澤康夫作の現代詩に作曲した箏伴奏の歌曲である。この曲には、声にも楽器にも高度な技巧が要求される。歌詞は、「枯らす」と「鳥」など、重層的、多義的、暗示的な現代詩である。それを表現する声の技法には、コトバとウタの対比、取りにくい跳躍音程があるかと思えば、ポルタメント的な連続的变化もあり、スタッカート唱法も用いられる。箏のパートはといえば、頻りに琴柱の移動があり、しかも多用される重音のために、琴柱は素早く正確に移動しなければならないし、押し手は、演奏者から遠く離れた低音弦の箏柱の反対側の弦を押さなければならなかったりする。演奏者の米川敏子氏は、柴田の要求する多彩な箏の音色を弾き分け、また、重音の音程の正確さは比類なく、柴田作品の魅力を伝えていた。

《遠野遠音》は、1991年に初演されたシアターピースで、「柳田国男「遠野物語」および東北民謡による」という副題の通り、朗読と民謡が組み合わせられて構成されている。演奏はコール淡水・東京とお茶の水女子大学音楽科卒業生有志で、指揮は本大会の実行委員長でもある永原恵三氏。朗読と歌の組み合わせ、客席を縦横に移動する合唱団は、すでに《追分節考》に用いられた手法だが、ここでは、女声は舞台に留まることで家庭を守ることを表し、男声は客席を移動することにより外で働くことを表しているという。さまざまな方向からふりかかる歌と朗読とがあいまって、柳田国男の「遠野物語」の世界が声のシャワーとなって降り注いでくるような体験であった。

柴田の作品が、今なお新鮮で聴き手に強い感銘を与えるすばらしい作品であることを、会場の一同が再認識する機会でもあった。 薦田治子



◇第33回田邊尚雄賞授賞式・受賞祝賀会

第33回田邊尚雄賞は、時田アリソン氏による *Japanese Singers of Tales Ten Centuries of Performed Narrative* (2015年3月、イギリス：Ashgate) であった。授賞式は、放送大学文京学習センターにおいておこなわれた。選考委員長である加納マリ氏の代理として選考委員の三浦裕子氏から授賞理由が述べられ、会長の塚原康子氏より賞状と賞金が授与された。語り物音楽を総合的に捉え、それぞれの種目の特徴とともに、種目間の共通性や連続性を見出した点が評価された。

その後、お茶の水女子大学生協食堂マルシェに場所を移し、受賞祝賀会がおこなわれた。奥山けい子氏からの祝辞では、幅広い領域を網羅した力のこもった著作であり、それぞれの種目で構造レベルを設定するなど、日本の語り物音楽の特徴を読者に親切なかたちで提示していることなどが紹介された。受賞者である時田氏からは、本書のアウトラインができあがったのは清元節の稽古と研究に取り組みはじめて間もなくだったという興味深いエピソードや、長年の研究活動で出会った多くの先達や同士への感謝が述べられた。そして英語で書かれた書ではあるが、学会員はじめ多くの方に手にとっていただき意見を交換したいという謙虚で前向きな言葉で締められた。時田氏は現在、浪花節や近代琵琶の音楽に興味をお持ちだという。さらに多くの種目を包含した日本の語り物音楽の著書を拝読できる日が待ち遠しい。 大久保真利子

第2日(11月6日)

◇研究発表1-A(司会：遠藤徹)

北宋雅楽改革への過程—唐末昭宗期から北宋仁宗期まで—

松浦晶子

松浦氏の発表は、北宋の雅楽は復古的・頹廢的だとする従来の偏った見方から脱却し、一つ一つの史実に向き合い、当該期の雅楽に対して、より正しい見方を打ち立てようとするものである。発表では李照に焦点を当てた。即ち、仁宗と劉皇太后の対立から続く政治情勢の変化を李照が上手く見極め、時勢に乗って提唱した李照の音律論が「新たな時代の幕開けにふさわしい音楽として、仁宗の心を揺さぶったか」(同氏レジュメ)と考えられ、政局における対立も李照の音律論を後押しした、という。このように、音楽と政治情勢を有機的に結びつける論を展開していた。会場からの質問に対する回答では、(1)新たな音律を定めた原因は儒教的要請があった他に、旧来の高音域の音律を歌人が歌えなかったことにも因るだろう、(2)宋代雅楽の日本に対する影響は不明である、(3)唐と宋の音楽には明確な差異があり、これが音楽史における時代区分を考える手掛かりになるだろう、と答えた。今回の

発表は、同氏が大きく構想している研究の一部であると思えるので、今回の内容をその全体図の中に位置付けるなどして、今後、同氏の研究が大成することを願う。

鳥谷部輝彦

書陵部蔵『琵琶諸調子譜』について

根本千聡

伏見宮家旧蔵『琵琶諸調子譜』の書誌・譜の構成・譜の問題点・原本成立の背景について、発表資料A46枚、譜表A33枚を用いて淀みない発表をおこなった。発表者の譜本閲覧は叶わず、デジタル公開画像による調査という。論旨は、大会プログラム13頁に掲載の「要旨」の通りである。会場からは、①他の伏見宮本琵琶譜との関係、書誌学的に検討するには琵琶譜3本の総合的考察が必要との指摘があった。②選者の確認について発表者は、流派に分かれる前の人物ではないか。譜本に書写者名がないことから兵衛命婦や高明女も考えられる、などと追加説明した。③譜本に〈其駒〉と〈大鳥〉が入っているのはなぜかという質問は、本譜の成り立ちを解く鍵ともなる。報告者は①譜本成立時期や原本選者については、譜の「書き手」という専門職があったことを念頭におくべきで、所収曲順や筆跡などから、周辺各譜を校合することが望ましい。②双調渡物成立年代については、御遊史の考察が必要で、諸書にいう「堀川院」云々よりかなり早い時期から行われていたと推測する。

蒲生美津子

◇研究発表1-B(司会:福岡正太)

アジアの青銅熱間鍛造ゴングの系譜—ジャワ中部スラカルタ地域とミャンマー中部マンダレー地域の製造法の類似性から—

田村史子

プログラムの概要を見る限り、発表者はインドネシアのスラカルタと東南アジア内陸部のマンダレーに共通した熱間鍛造ゴングの製造法が分布することを突き止め、その系譜を辿ろうとするたいへん興味深い研究のように見受けられる。ところが、実際の発表では、発表内容の時間配分がまずく、ゴング製造法の概説とインドネシアの熱間鍛造ゴングの製造法の説明に大半の時間を割き、その結果、制限時間が迫り、後半のマンダレーのゴング製造法にはちょっと触れただけで、全体の発表が尻切れトンボに終わってしまった。意欲的な研究だっただけに、発表の趣旨が会場の聴き手に十分に伝わらなかったことがたいへんに残念であった。一方、スラカルタのゴング製造過程の貴重な映像を時間をかけて紹介したことには大きな意義があり、インドネシアの熱間鍛造ゴングの製造法だけに焦点を絞った発表でも良かったろう。両地域のゴング製造法の類似性やその系譜を問題とするのであれば、提供する情報をもっと絞り込んだ、より効率的な発表の仕方が

工夫されるべきであった。

塚田健一

ショピ民族の木琴ティンピラの復興と現代的な展開—一国や地域を超えて演奏を行う奏者らに着眼して—

古謝麻耶子

日本ではアフリカ音楽研究の基盤や伝統がまだ充分にないにもかかわらず、モザンビークのショピ人のティンピラ(木琴)音楽に関するすぐれた研究発表であった。研究対象の基本情報、研究の趣旨と方向性の提示、先行研究のレビューなど過不足のない前置きのあとに、ショピの二つの木琴ジャンルの発展過程を植民地時代から独立後にかけて、一方は「芸能の保存」、他方は「芸能の発展」という対照的な視点から描き出そうとする発表内容は、非専門家が聴いても充分にわかるほど情報がよく整理され、まとめられていた。また、いわゆるフォークロアの伝統を従来のように「集団性」の観点からではなく、特定の「個人」に焦点を当てて描き出そうとする点、さらにフォークロアのあり方の変化を独立後の文化政策との関わりの中に見据えようとしている点は、民族音楽学研究の今日的な動向を発表者がしっかりと理解していることの証であると思われた。

塚田健一

◇研究発表2-A(司会:加納マリ)

天王寺方楽家岡家の楽人としての活動

出口実紀

出口実紀氏の発表は、江戸時代の天王寺方楽家の一家である岡家の岡昌名を中心に、その父である昌純および昌名の息子たちの四天王寺、禁裏などへの出仕状況を関連する記録をたどることによって明らかにし、その活動状況について詳細に報告されたものであった。まず、このような研究が、江戸時代の雅楽史を解明する上での貴重な基礎となることを評価したい。出口氏は、まとめとして、①楽人として活動開始は8歳もしくは9歳、②20代までに大半の左舞を修得する、③禁裏での参仕では、舞楽は陪臚(左方)のみ舞人を務めたとされたが、四天王寺では童舞の必要性故に初出仕の年齢が低くなっている可能性があり、京都市や南都方と比較も必要であること、禁裏では陪臚は右舞であるが四天王寺では左右兼帯の舞であるために、岡家は四天王寺では左舞人として、禁裏では右舞人としてこれに参仕したことの説明が必要だったと感じる。また、出口氏は、昌名による『新撰楽道類聚』の編纂は、『楽家録』のような体系的な楽書の編纂を目指したものとされたが、当時の楽人たちは状況に応じて、三方楽所の一方として、あるいはその一方の中的一家として、さらには、家の芸の伝承者としての立場を使い分けており、昌名による同類聚編纂の意図を明らかにするためには、こうした観点も踏まえての考察も必要だと思われた。

南谷美保

明和改正謡本の節付「ウ」—江戸中期能楽観世流の中音旋律—

高橋葉子

高橋氏の要旨は次の通り。1) 観世宗家が江戸中期に刊行した明和改正謡本は詳細な節付が施され、基本はいまも継承されるが、現在は伝存しないフシがあることが分かった。それはヨワ吟の中音フレーズの中で中音から一時的に音を浮かし、中音に戻すフシである。2) このフシは大正時代初期まで謡われていたことが分かった。3) 謡本刊行をめぐって観世宗家と係争中であった分家の観世清之家は、このフシを否定していた。宗家の観世元滋は大正改版(1920年～)にあたって、このフシを廃止した。

高橋氏は1786年筆の謡伝書「そなへはた」の音階論や、明治・大正期の謡関係の諸書を用いて、変遷過程をていねいに説いた。氏は、このフシが自然に消滅したのではなく、当時盛んな清之家による刊行会本と、その背景にある、直線的・簡潔な謡い方を好む感受性の影響を受けたと想定したが、音組織の変遷への社会的な関与を示して興味深い。この古いフシをいま聞くと斬新に感じられ、音感覚の移ろいを実感する。

奥山けい子

◇研究発表2-B(司会:高松晃子)

現代におけるクレズマー音楽の伝承

—「イディッシュ・サマー・ワイマール」を事例として—

三代真理子

1970年代北米を皮切りに復興したクレズマー音楽の現代における伝承のあり方について、ワイマールでのワークショップ(以下YSW)を事例とした詳細な報告であった。質疑応答では、こうしたワークショップ(以下WS)がユダヤ人社会からの伝承の拡散といえるのではないかという指摘に対し、ある意味でヴァーチャルなユダヤ人社会の役割も果たしているため伝承としての意味もある、との見解が示された。またYSWが他のWSと比べて大規模化した要因として、ドイツでのクレズマー人気についての補足説明があった。歴史的経緯ゆえの複雑な展開にもかかわらず、中欧におけるクレズマー復興を論じた研究が少ないなか、三代氏の発表はWahgórska 2013(クラクフとベルリンにおける民族誌的研究)を補完するような調査報告であり、他のWSとの比較や各地の歴史的背景を考慮に入れたアプローチにより興味ぶかい研究進展が望まれるものであった。

佐藤文香

アレッポの伝承歌謡カッド—音楽的および詩的内容とその特徴—

飯野りさ

アレッポの音楽教育の基本をなすとされる歌謡カッドの音楽および詩の特徴について、実演をまじえた報告であった。ムワッシャブに比べ従来あまり論じられることのなかったカ

ッドに注目し、各旋法の特徴を習得するうえでその性質を確認しておくことの重要性を明らかにした点が本研究の意義だということだったが、早口ゆえに聞き取れず、発表内容と重複する説明が質疑応答時に要された点が残念だった。カッドをとおして習得された各旋法の旋律型を担い手が即興の際にどのように認識し、どのように即興行為を言語化しているのか、についても考察に含めていけば、旋法学習のメカニズム理解が一層高まっていたのではないかと思われた。今後の研究展開に期待したい。

佐藤文香

オラリティの可能性—オングを越えて—

梶丸岳

オングのリテラシー論に対する批判(彼のいうリテラシーは学校教育などの社会文化的脈絡により獲得される能力であり、文字を書く能力(じたいは別)はニューリテラシー研究で十分に展開されているが、オラリティに対する展望は見られないという現状を懸念し、彼のいうオラリティをこえた音楽研究アプローチの可能性を探ろうとする発表内容だった。質疑応答では、音楽研究においてオングのリテラシーとオラリティという対立的構造は否定され、むしろ連続体として捉えられ、とりわけ演奏伝承の問題で改訂されながら咀嚼されていった経緯が指摘された。梶丸氏は、楽譜の分析に重きを置くのではなく、もっとオラリティを取り入れてはどうかという考えから今回の発表に至ったとのことだったが、スターンによる視聴覚連続批判もふまえていけば、より具体性のある提案につながっていたのではないかと思われた。今後の議論の展開に期待したい。

佐藤文香

◇研究発表3-A(司会:井上登喜子)

渡鏡子の「音楽学者」としての活動意義

—昭和戦前期の評論、翻訳を中心に—

仲辻真帆

本発表は東京音楽学校本科作曲部第1期生だった作曲家渡鏡子の音楽学者としての活動に焦点を当てたものである。渡は作曲家として活動しただけでなく、音楽学者として活動したことも明らかである。発表では渡の研究活動を「雑誌記事」、「事典執筆文」、「著書・訳書」の3つに大きく分け、その中に渡が執筆した「雑誌記事」の内容を一覧表で細かく示している。仲辻氏の調査によると、渡は東京音楽学校研究科に在籍した1937年から様々な音楽雑誌に投稿していた。渡によって書かれた記事の数は現段階で62篇あることが確認されており、そのほとんどは1945年までに書かれたものであった。また、記事の内容によって「評論」と「翻訳」の2つに大別することができる。それらの記事は、新しい音楽理論や作曲法を紹介し、また当時あまり知られていなかった作曲家

と彼らの作品に関する情報を発信している。特に、渡がチェコとハンガリーの作曲家に関心を持ったのは、東京音楽学校で教鞭をとったクラウス・プリングスハイムの影響であったと指摘している。そのほか、渡は作曲技法に関する問題提起も行なった。本発表は、音楽学という学問分野がまだ確立されていなかった昭和戦時期において、渡の執筆活動が音楽学の先駆的な役割を果たし、当時の日本の音楽界に一定の影響を与えたことを示唆するものである。

劉麟玉

旧住吉村の社交にみる音楽活動—木曜会の『記録』をもとに— 齊藤紀子

旧住吉村は現在の兵庫県神戸市東灘区と灘区の一部にあたり、実業家の郊外住宅地として開発された地域である。本発表で齊藤氏は、旧住吉村に居住している実業家の夫人たちの生活に取り入れられた音楽活動、とりわけ木曜会における音楽活動記録について報告された。木曜会は1925年に4人の実業家夫人によって発会され、大阪を代表する若手実業家の社交倶楽部、サースデー倶楽部内に置かれた社交グループであり、時間的・経済的にゆとりのある夫人たちがお互いに交流し、情報や趣味を共有する場であった。齊藤氏は1925年から1935年までの10年間の『木曜会記録』に基づいて夫人たちの社交活動を調査し、その中でも音楽鑑賞活動に焦点を当てている。鑑賞されたものは歌舞伎や宝塚歌劇などさまざまな音楽ジャンルにわたった。出向いた会場は兵庫、大阪、京都の有名劇場にあり、広範囲に移動したことがわかり、また、公的場所ではなく、時に個人の邸宅が活動のために開放されたこともあるとの資料は示している。本発表は当時の阪神間の音楽文化における木曜会の活動をどう位置付けるのかという結論には至っていないが、木曜会の夫人たちが積極的に音楽を鑑賞した事実や実施した公演やコンサートの内容から、当時の音楽文化や夫人たちの音楽嗜好をある程度窺い知ることができたのではないかと考える。

劉麟玉

植民地朝鮮における関西の歌舞伎俳優による公演 —片岡我童と中村扇雀の公演事例を中心として—

金志善、鹿倉由衣

植民地朝鮮に渡った日本の伝統芸能の関係者は少なくなかったが、本報告で金氏と鹿倉氏はこれまで注目されてこなかった上方歌舞伎俳優、片岡我童と中村扇雀の公演の実態を取り上げた。両氏は主に『京城日報』の記事を用い、公演中の状況や公演の演目と出演者を調査した。片岡我童は1936年に十二代目片岡仁左衛門を襲名し、中村扇雀は1941年に四代目中村翫雀を襲名した人物で、二人とも関西の歌舞伎界で活躍した代表的な俳優であった。片岡は1921年8月と同年9月の2回にわたって「京城」を訪ね、公演を行った。一方、

中村が「京城」で巡業を行ったのは、1938年6月と1939年3月の2回であった。二人が植民地朝鮮に渡った時期はだいぶ離れていたが、それぞれの公演に参加した一行の総勢は100名ほどであった。その様子については『京城日報』で大きく報道された。本報告は、植民地朝鮮における日本伝統芸能の公演状況の一端を窺うことができ、またレポーター自身の研究課題とも重なるところが多く、興味深いものであった。ただし、関西歌舞伎公演が持つ意義については、「日本本土の延長線」という結論にとどまらず、もう少し深い視点で研究を進めることも可能ではないかと考えられる。最後に報告者が示した今後の課題についてもその研究成果を期待したい。

劉麟玉

◇研究発表3-B

〔セッション〕

国民的楽器のあり方—ユーラシアの三弦撥弦楽器を比較する—

発表者代表：柚木かおり

発表者：濱崎友絵、山中信人

3つの三弦撥弦楽器を、楽器と上演の現状、「国民的楽器」となった歴史的経緯、楽器に対する自国民の意識、の側面から比較する、情報満載の企画であった。

柚木氏：「貧しい農民の楽器」バラライカは、愛好家による19世紀末の近代化を経て、20世紀初のソ連政権で「我が国の楽器」となった。以来、楽器と音楽文化は、フォークロア・舞台化したフォークロア・コンサートに三分されたが、こうした「公設文化」の枠組みは、バラライカの「自生」には足枷となりかねない。

濱崎氏：トルコ共和国成立後、政府はトルコ古典音楽を否定し、洋楽導入と民俗音楽を奨励した。その過程で民俗音楽≒民謡の調査が進み、バーラマの地方様式も規範化、ラジオを通じて認知も進んだ。現在、私設公設の学習機関と公共放送が、共に規範の継承を支えつつ、独奏には規範を外れる自由を認める。またポップス等の音楽形態とも接続可能なゆえに、国民の支持は根強い。

山中氏：盲人の門付に始まる津軽三味線は、昭和以降、舞台化する民謡の伴奏や独奏楽器へと変貌。同時に、担い手や楽器の状態、奏法も大きく変化した。

三つとも、「草の根」の伝承が、近代化等の過程で新しい意味を獲得するストーリー性(濱崎氏)を帯びるが、当該文化では、今でも泥臭い原イメージが拭えないという。傍聴者には、原イメージの残存も「ストーリー性」の一環で、近現代の転換期に各地で浮上した「草の根」の楽器に、共通の傾向と思われた。

フロアとの質疑：Q1 国民的楽器と民族楽器との違いは何か。A1 バラライカはあくまで前者、バーラマは国民国家の

形成時に両義を帯び、津軽三味線は津軽地方の「民族楽器」、日本の国民的楽器は三味線である。Q2 三弦撥弦楽器はユーラシア大陸で広く普及する。3件の楽器にも、左手の操作性や音域の妥当性等、普及の裏付けとなる要素があるか。A2 運指や音域が人体構造や人間の声域に適する(濱崎氏、山中氏)、製作が容易(柚木氏、濱崎氏)。尾高暁子

◇研究発表4-A(司会:永原恵三)

ドイツ語圏における日本音楽研究

—ケルン日本文化会館の活動から—

田辺沙保里

本発表は、ケルン日本文化会館(国際交流基金の海外拠点の一つ)の運営面に着目し、とくに同館での海外公演のありようを明らかにすることを通じて、日本音楽の受容において同館の果たしてきた役割を考察することを目的とするものだった。対象年代は1969年~2009年までの40年間であり、研究方法は同館発行『事業報告書』内掲載の演奏会情報の項目を元に、(1)公演回数の年代推移、(2)西洋音楽の種目別件数内訳、(3)日本音楽の種目別件数内訳、について統計報告を行ない、さらに(4)同館の職員(ハインツ ディータ・レーゼ氏)による日本音楽の研究や紹介についても言及した。

同館の「場」のもつ機能について、(1)伝統的かつ多様な日本の音楽を受容できる場、(2)邦人演奏家・邦人作曲家の発表の場、(3)同時代の柔軟な日本の音楽形態を反映する場の3側面から総括し、「仲介の場に働く力学がもたらした創造的な文脈」として同館の機能を結論づけた。

フロアからは複数の助言があがった。同館の事業を考察するには日本の外務省や文化庁の役割にも目を向けなければならないという指摘や、レーゼ氏への聞き取りが必要ではないかという意見もあった。三島わかな

三線が媒介する人間関係とその価値の推移 —大阪の事例から—

栗山新也

本発表は、沖縄の人びとの主要な出稼ぎ地・大阪を対象として、三線がどのような人間関係を媒介し、また三線をめぐってどのような価値づけがなされたのかを解明するものだった。その視点は、三線の「移動」「製作」「継承」の3つの側面に向けられた。三線の移動面については文献『琉球三味線宝鑑』(1954)の整理にもとづき、製作や継承面については聞き取り調査を主体としたものだった。

解明点は次の3点である。(1)大阪での古典音楽の早期普及が沖縄から当地への三線の流入をもたらし、音楽の正真性ととも楽器の正真性が求められた、(2)大阪で製造業従事の沖縄出身者が三線の材料を沖縄の三線職人に届けた事例等から、大阪・沖縄間で三線製作・販売ネットワークが形成さ

れた、(3)所有者が替わることで系譜意識が芽生え、実用的価値よりも記念品の価値へと三線の価値が推移した。

フロアからは時代設定の中で論じた方が良いという意見があった。三線の価値づけの諸相を解明する際、大阪の人びとが志向した音や響きのありようへの視点をも携えることによって、一層興味深い研究になるだろう。三島わかな

世界音楽教育におけるインターネット資源の活用

—動画配信サービスの場合—

小日向英俊

本発表は、動画配信サービスの中でも、主にYouTubeの授業における利用の有用性と問題をわかりやすく紹介するものだった。歴史的映像から最近の動画まで、幅広く多くの人にアクセス可能なYouTube動画の教材としての利用価値は、教育者の多くが認識しているだろう。VHSやDVDなどのメディアによる既存の世界音楽教材は、内容が古くまた収録範囲にも限界がある。発表ではUNESCOの無形文化財の動画など、有用性の高いものが紹介された一方、多くの動画はドキュメンテーションが不足しており、また検索が困難であるなど問題点も指摘された。ネット接続の安定性や投稿の削除を懸念して、あらかじめダウンロードして動画を利用している方も多いと思うが、その合法性についてはグレーゾーンとの答えだった。司会の永原恵三氏からは、ネット業界に支配されるのではなく、教育現場からの動きも必要という意見があった。音楽研究者の間で、質的・法的に安心して使える動画を共有できるシステムが構築できたら理想的だ。

早稲田みな子

◇研究発表4-B

〔共同発表〕

「芝居囃子日記」再検

発表者代表:前島美保

発表者:土田牧子、鎌田紗弓、木岡史明

六代目田中伝左衛門の筆録「芝居囃子日記」は原本が伝存せず、諸本の系譜が複雑である。原本の写本に三代目杵屋勘五郎によるものがあつたが戦災で失われ、これを焼失前に町田嘉章が敷き写した町田本が残った。西山松之助が町田本を再発見して田中宗家に謹呈すべく筆写し(西山本)、これを機に芝居囃子日記研究会(以下、研究会)が発足。その成果は出版の予定もあつたがすぐに実現せず、時を経て西山本を底本とする活字翻刻(活字本)が『日本庶民文化史料集成』に収められた。本発表は、このたび東京文化財研究所で所在確認された町田本を底本とした翻刻、および活字本との校合により「芝居囃子日記」再検へと繋げるものであつた。

町田本と活字本の校異は2点に分けて報告された。まず活字本には「大」と「太」の混同から生じた誤りが散見されると指摘した。次に、唱歌(しょうが)、下座音楽、人名、音楽関連用語の具体例を取り上げ、文脈や上演記録等から町田本がより理に適っていると、いずれも納得できる説明であった。なお、研究会や活字本翻刻で西山本を底本とした一因として、十一代目田中伝左衛門の研究会参加に言及したことは、研究会の意義を知る上で興味深い。

最後に「芝居囃子日記」成立の背景について、天保の改革前後の劇界の不安定化と五代目伝左衛門から六代目への代替わりが重なったため、歌舞伎や囃子の伝承に危機感が募ったと説明した。

フロアからは、町田がほぼ硬筆しか用いなかったことから、町田本の硬筆署名は自筆だが、毛筆の本文敷き写しは「御屋舗番組控」を筆写した早川与輔に依頼したのではないかとの重要なコメントがあった。

本発表では、活字本との異同を併記した町田本の全文翻刻が配布され、参加者の貴重な資料となった。所在不明の他の写本の追跡や、本発表直前に存在が明らかになったという研究会記録の検討によってさらなる進展が期待される。

前原恵美

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2016年10月2日(日)に東京藝術大学において第9回通常理事会が、2016年11月5日(土)に放送大学東京文京学習センターにおいて第5回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細については、後掲の第5回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、2016年4月4日以降に仮承認された賛助会員1団体、正会員5名、学生会員4名および当日入会申請書を受理した正会員1名が会員として正式に承認されました。

2) 80周年関連事業推進委員会の設置について

理事会において、学会創立80周年の関連事業のために80周年関連事業推進委員会を設置し、遠藤徹(委員長)、田中多佳子、川崎瑞穂、比嘉舞の4氏が委員となることが承認されました。

3) 平成27年度公益目的支出計画実施報告書について

社団法人から一般社団法人への移行が完了するまで提出が義務づけられている公益目的支出計画実施報告書について、平成27年度の報告書の内容が承認されました。

臨時理事会議決事項のお知らせ

2016年11月6日に放送大学東京文京学習センター会議室において臨時理事会が開催され、理事の役割分担、支部委員、各種委員、参与、参事が以下のように決まりました。また、正会員3名の入会が承認されました。その他、第34回田邊尚雄賞選考委員について、吉川周平氏の辞退にともなって加藤富美子氏に新たに委嘱することが承認されました。

1) 理事

[会長] 遠藤徹

[副会長] 澤田篤子

[東日本支部長] 野川美穂子

[西日本支部長] 藤田隆則

[沖縄支部長] 小西潤子

[常務理事] 小塩さとみ、小日向英俊、高松晃子、増野亜子、早稲田みな子

[総務] 遠藤徹、小塩さとみ、小日向英俊(情報委員会担当)、福岡まどか(田邊賞担当、兼西日本支部担当)、増野亜子(兼広報)

[経理] 高松晃子、早稲田みな子

[広報] 澤田篤子、増野亜子(兼総務)

[機関誌] 梅田英春、竹内有一(兼西日本支部担当)、横井雅子

[東日本支部担当] ギラン・マツト

[西日本支部担当] 竹内有一(兼機関誌)、福岡まどか(兼総務)

2) 支部委員

[東日本] 奥山けい子、金光真理子、ゴチエフスキー・ヘルマン、近藤静乃、土田牧子、鳥谷部輝彦、濱崎友絵、福田千絵、福田裕美、伏木香織、森田都紀

[西日本] 伊藤悟、上野正章、梶丸岳、武内恵美子、田中多佳子、出口実紀

[沖縄] 岡田恵美、高瀬澄子、三島わか

3) 各種委員

[会報編集委員会] 大久保真利子、神野知恵、澤田篤子(委員長)、中川優子、増野亜子、松本民菜、安原道子、山下正美、横山洸

[機関誌編集委員会] 梅田英春、奥中康人、加納マリ、竹内有一、横井雅子(委員長)

[情報委員会] 岡田恵美、小日向英俊(委員長)、佐竹悦子、塚原健太

[ICTM 担当] 早稲田みな子

[藝関連担当] 遠藤徹

4) 参与
酒井諄

5) 参事

[総務] 五十嵐美香、太田郁、鎌田紗弓、神野由布樹、
ツェルゲル、仲辻真帆、彭泓、山本美季子
[広報] 大久保真利子、神野知恵、中川優子、松本民菜、
安原道子、横山洸
[機関誌] 川崎瑞穂
[東日本支部] 木岡史明、鯨井正子、倉脇雅子、齊藤紀子、
佐竹悦子、曾村みずき、田辺沙保里、田村にしき、
中村ひかる、宮内基弥、村山佳寿子、吉岡美咲
[西日本支部] 竹内直、中安真理
[沖縄支部] 古謝麻耶子

会員の受賞

◇仲辻真帆さんが柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞

本学会会員で参事の仲辻真帆さんが、評論「《優しき歌》
柴田南雄と立原道造の「時間的建築」および「信時潔没後
50周年記念演奏会」と「オーケストラ・ニッポニカ第28回
演奏会」の評により、第3回<柴田南雄音楽評論賞>奨励賞
を受賞されました。授賞式は9月24日、東京の日本工業俱
楽部にて行われました。

◇時田アリソンさんが京都新聞大賞を受賞

会員で昨年度の田邊賞を受賞された時田アリソンさんが、
長年の日本音楽研究への貢献により京都新聞大賞・文化学術
賞を受賞されました。贈呈式は11月25日、京都新聞文化ホ
ールで行われました。

第34回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第34回田邊尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、
推薦情報を募集しております。アンケート締切まであと僅か
となりました。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、
皆さまからの積極的なアンケート送付を切望いたします。自
薦他薦は問いません。

選考対象：2016(平成28)年1月1日~12月31日の発行物

アンケート締切：2017(平成29)年2月3日(金) 正午

記入事項：著者名、発行年月日、発行所名

なお、論文の場合は、掲載誌名、巻次、編集者名、
論文頁数も記してください。推薦理由を簡潔にお
書き添えいただいても構いません。

送り先：東洋音楽学会 第34回田邊尚雄賞選考委員会
(郵送) 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3
三春ビル307号

(FAX) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

選考委員：井上貴子(委員長)、中原ゆかり、奥山けい子、
吉野雪子、加藤富美子

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせ

1. 会費納入のお願い

2016年9月から新しい年度が始まりました。会費未納の方
は、金額をお確かめの上お払込くださいますよう、お願い申
上げます。振り込み用紙を紛失された場合は、下記学会口
座宛にお振込ください。なお、本会報と入れ違いに納入され
た場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8,000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6,000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号] 00160-6-55723

[加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名] 〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)

[当座] 0055723

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生・研究生割引の制
度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会
のホームページ(<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認
の上、お申し込みください。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、
学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご
注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が
発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その
旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集(7月例会)

2017年7月1日(土)に開催される東日本支部定例研究会での研究発表を募集しています。

発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、4月20日までに、東日本支部事務局あて、お申し込みください。

なお、発表希望をご提出後1週間経過しても事務局からの連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

[東日本支部事務局]

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3

三春ビル307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail : tog.higashi@gmail.com

沖縄支部からのお知らせ

平成28年度役員改選により、沖縄支部はこれから2年間、下記の支部担当理事、支部委員、参事が運営します。これに伴い、事務所連絡先も変更になります。どうぞよろしくお願いたします。

支部長：小西潤子

支部委員：高瀬澄子(会計) 岡田恵美(例会)

三島わかな(例会)

参事：古謝麻耶子

沖縄支部事務所：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付

Tel/Fax 098-882-5016

ICTM(国際伝統音楽学会)に関するお知らせ 第44回 ICTM 世界大会(於：アイルランド)のお知らせ

日時：2017年7月13日～19日

場所：Irish World Academy of Music and Dance, Limerick
(アイルランド、リムリック)

ICTMの創立70周年を記念する2017年の世界大会は、以下のテーマのもと開催されます。

1. 70 Years of ICTM: Past, Present and Future
2. Legacy and Imagination in Music and Dance
3. Ethnomusicology, Ethnochoreology and Digital Humanities
4. Exploring Music Analysis and Movement Analysis in Ethnomusicology and Ethnochoreology
5. Music, Dance, Religious Politics and Religious Policies
6. New Research on Other Topics

発表形式は、1)個人発表、2)パネル、3)フィルム/ビデオ・セッション、4)フォーラム/ラウンドテーブルの4種類です。

大会の詳細については、大会ホームページ

(<http://www.ictmusic.org/ictm2017>)をご覧ください。随時情報がアップデートされます。大会ホームページは、ICTMホームページ(<http://www.ictmusic.org/>)のEventsの項目内、★New World Conferenceからも入れます。多くの会員のみなさんの参加を期待しています。

IMS2017 東京大会のお知らせ

かねてよりお知らせしている通り、IMS2017東京大会「音楽学：東西の理論と実践」が、2017年3月19日(日)～23日(木)、東京藝術大学上野校地で開催されます。

現代の音楽学のあらゆる領域のテーマによる研究発表370件、スタディ・セッション10件、ラウンドテーブル23件が実施される予定です。基調講演は徳丸吉彦氏、細川俊夫氏により行われます。大会にはどなたでも参加できます。大会プログラムの詳細や参加登録については、大会ホームページ<http://ims2017-tokyo.org>をご覧ください。

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2016年8月～12月、訂正箇所は下線部)

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

クス、E-mail等でも結構です)

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2016年8月~12月、到着順)

*Ethnomusicology and Audiovisual Communication:
Selected Papers from the MusiCam 2014 Symposium*

Universidad de Valladolid – Aula de Música

『東方學會報』No.110 (一財) 東方学会

『楽道』8,9,10,11,12月号 (公財) 正派邦楽会

『箜篌の研究 東アジアの寺院荘厳と絃楽器』

中安真理 思文閣出版

『二〇世紀日本レコード産業史 グローバル企業の進攻と
市場の発展』 生明俊雄 勁草書房

『中東世界の音楽文化 うまれかわる伝統』

西尾哲夫・水野信男編著 スタイルノート

『常磐津節演奏者の経歴に関する調査報告書 2015年度

「常磐津節演奏者名鑑 第5巻」(近代3:明治期から昭和
期まで(上))』 竹内有一編著 常磐津節保存会

『日本伝統音楽研究』第13号

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

『雅楽だより』第47号 雅楽協議会

『日本音楽学会会報』第98号

『音楽学』第62巻1号 日本音楽学会

『能・狂言映像史研究序説 啓蒙・教育映画《Noh Drama》
《狂言》を中心に』 武蔵野大学能楽資料センター

『琉楽百控 琉球古典音楽野村流工工四百選 楽譜と解説』

ロビン・トンプソン 榕樹書林

『翻刻 雅楽小辞典 南都楽家辻家旧蔵(国立歴史民俗博物
館蔵)』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究
報告10)

雅楽・舞楽および関連芸能のいまとむかし共同研究会編
『謡を楽しむ文化 京都の謡の風景』(京都市立芸術大学日
本伝統音楽研究センター研究報告11)

藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江共編

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

『民俗芸能研究』第61号

民俗芸能学会

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

◆住所・所属等に変更がありましたら事務局までご連絡ください。
(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファ

『筑前琵琶 師から弟子へ 〈安宅〉直伝の記録』
(DVD3枚) 出演: 山崎旭萃、奥村旭翠
制作: 中山一郎 アド・ポポロ/インフォメーション

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物、価格(税別))

『相倉久人にきく昭和歌謡史』相倉久人(著)、松村洋(編著)、
アルテスパブリッシング、2,000円
『足利義政と東山文化』河合正治、吉川弘文館、2,200円
『ヴァイオリンBasics(ベーシック)——いつでも学べる基本練習300』サイモン・フィッシャー(著)、
木村恭子・勅使河原真実(訳)、音楽之友社、5,000円
『ウィーン 総合芸術に宿る夢』(西洋近代の都市と芸術4)
池田祐子(編集)、竹林舎、15,000円
『うたごえの戦後史』河西秀哉、人文書院、2,200円
『エッセンシャル・ディクショナリー 音楽用語・作曲家』
リンジー・C・ハーンズバーガー(著)、八木澤教司(監修)、
元井夏彦(訳)、ヤマハミュージックメディア、1,100円
『「音楽づくり・創作」の授業デザイン——あすの授業に生かせるアイデアと授業展開』
石上則子(監修)、教育芸術社、2,000円
『音楽の原理』近藤秀秋、アルテスパブリッシング、8,000円
『音楽表現学のフィールド2』
日本音楽表現学会(編集)、東京堂出版、3,200円
『神楽と祭文中の世 変容する信仰のかたち』
斎藤英喜・井上隆弘(編集)、思文閣出版、8,000円
『歌舞伎の音楽・音』配川美加、音楽之友社、4,500円
『君も星だよ——合唱曲《COSMOS》にこめたメッセージ』
ミマス、音楽之友社、1,500円
『宮廷の御神楽 王朝びとの芸能』(新典社新書68)
中本真人、新典社、1,000円
『キューバ音楽を歩く旅』さかぐちとおる、彩流社、2,000円
『箏篋の研究 東アジアの寺院荘厳と絃楽器』
中安真理、思文閣出版、6,000円
『郡上踊りと白鳥踊り 白山麓の盆踊り』
曾我孝司、雄山閣、2,000円
『座敷唄集成』(全132曲歌詞 特別付録CD104曲)
井澤壽治、東洋書院、2,700円
『柴田南雄 音楽会の手帖』柴田南雄(著)、小沼純一(解説)、
アルテスパブリッシング、2,800円
『世界シネマ大事典』
フィリップ・ケンブ(編集)、遠藤裕子・他(訳)、三省堂、4,200円
『武満徹——ある作曲家の肖像』小野光子、音楽之友社、5,500円

『中国音楽史図鑑』劉東昇・袁荃猷(編著)、
明木茂夫(監修・翻訳)、国書刊行会、26,000円
『中国の音楽文化 三千年の歴史と理論』
川原秀城(編集)、長井尚子・他(著)、勉誠出版、2,000円
『中東世界の音楽文化 うまれかわる伝統』西尾哲夫・
水野信男(編著)、飯野りさ・他(著)、スタイルノート、3,600円
『東洋汽船と映画』松浦章・笹川慶子、関西大学出版部、3,100円
『徳川家康 その政治と文化・芸能』
笠谷和比古(編集)、宮帯出版社、3,500円
『都市祭礼文化の継承と変容を考える ソーシャル・キャピタルと文化資本』山田浩之、ミネルヴァ書房、5,000円
『トルコ音楽の700年 オスマン帝国からイスタンブールの21世紀へ』関口義人、DU BOOKS、2,500円
『二〇世紀日本レコード産業史 グローバル企業の進攻と市場の発展』生明俊雄、勁草書房、3,800円
『日本を知る〈芸能史〉上巻 アジアの視点』
田口章子、雄山閣、2,800円
『能と狂言 14 〈特集〉能の宗教的環境』
能楽学会(編集)、能楽学会、2,000円
『幕末期狂言台本の総合的研究 大蔵流台本編』
小林千草、清文堂出版、3,800円
『バッハ インヴェンション こころの旅』
杉浦日出夫、音楽之友社、1,800円
『バッハ・古楽・チェロ アンナー・ビルマスは語る』(CD付)
アンナー・ビルスマ;渡邊順生(著)、加藤拓末(編・訳)、
アルテスパブリッシング、3,800円
『バッハのすべて——生涯、作品とその名演奏家たち』(新編)
音楽の友(編集)、音楽之友社、1,600円
『ピアノ・テクニックの科学 プロフェッサー・ヤンケのピアノ・メソッド』
アンスガー・ヤンケ;晴美・ヤンケ(著)、
アドリアン・ヤンケ(論文翻訳)、酒井直隆(医学監修)、
アルテスパブリッシング、2,500円
『文化政策学要説』根木昭・佐藤良子、悠光堂、1,800円
『ヘンリック・ヴェニャフスキ ポーランドの天才バイオリニスト、作曲家』
エドムンド・グラブコフスキ(著)、
足達和子(翻訳)、富山房インターナショナル、1,800円
『細川俊夫 音楽を語る 静寂と音響、影と光』
細川俊夫(著)、ヴァルター ヴォルフガング・シュペラー
(聞き手)、柿木伸之(訳)、アルテスパブリッシング、3,800円
『ミドリ楽団物語 戦火を潜り抜けた児童音楽隊』
きむらけん、えにし書房、2,000円
『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』
国立歴史民俗博物館・他、青幻舎、2,130円
『リヒャルト・シュトラウスとホーフマンスタール』
三宅新三、青弓社、3,000円

『琉楽百控 琉球古典音楽野村流工工四百選 楽譜と解説』
ロビン・トンプソン、榕樹書林、5,800円

『The Cultural Interaction of East Asia Seas in the Early
Modern』 松浦章(編著)、関西大学出版部、3,200円

新発売視聴覚資料

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

●CD

『安藤政輝／宮城道雄を弾く6 童曲集1』
安藤政輝、VZCG-811、3,000円

『奇蹟の爪音／箏のレジェンド 衛藤公雄』
衛藤公雄、VZCG-8572、4,000円

『佐々木貞勝・小松みどり名演集／秋田民謡 道しるべ』
佐々木貞勝・小松みどり、VZCG-810、2,000円

『岩島小唄／ホーライエッチャ』おもだか秋子・松田隆行、
全日本民謡指導者連盟(監修・解説)、VZCG-10564、1,200円

『華姿舞(かふうのまい)／湯あみおどり』
新内枝幸太夫、COCA-17244、1,204円

『紀伊國屋寄席／桂雀々名演集』
桂雀々、長井好弘(解説)、COCJ-39684、2,200円

『紀伊國屋寄席／柳家権太楼名演集』
柳家権太楼、長井好弘(解説)、COCJ-39683、2,200円

『上妻宏光／Newest Best 「粹 sui」』
上妻宏光、COCQ-85304、3,000円

『祝賀のおと／琴』
富山清琴(二代目)・米川敏子(初代)・他(演奏)、竹内道敬(解説)、
COCJ-39779、1,852円

『祝賀のおと／和楽器』
尺八ノリステン・堅田喜三久・他(演奏)、COCJ-39780、1,852円

『全日本民謡指導者連盟監修「下北小唄(青森県)／博多どん
たく(福岡県)」』 二代目井上成美・湯浅みつ子、
COCF-17229、1,200円

『季(TOKI) 秋』藤原道山、野川美穂子(解説)、英訳解説付、
COCQ-85306、2,222円

『フェウタイ』 佐藤和哉、COCQ-85297、3,000円

●DVD

『第二十回日本伝統文化振興財団賞／川瀬露秋(地歌箏曲・
胡弓)』 川瀬露秋、VZBG-52、3,500円

●カセット

『華姿舞(かふうのまい)／湯あみおどり』
新内枝幸太夫、COSA-2320、1,204円

編集後記

大会レポート号をお送りいたします。このような充実した
大会報告を掲載する学会会報は多くないように思います。そ
れを可能にしている皆様のご協力、特に執筆者の皆様のご
協力を心から感謝いたします。なお今号をもちまして会報編
集委員が交代します。永原・井上・渡邊は今号で退任し、澤
田・山下・神野・中川が新規委員として編集の任にあたります
(他のメンバーは継続いたします)。手前味噌で恐縮です
が、この場を借りて、2年間ともに任務にあたってきたメンバ
ーに心から感謝の言葉を贈らせてください。ありがとうございました。
また次期編集委員会は気持ちを新たにスタートいた
します。今後ともよろしく願い申し上げます。

増野亜子

会報編集委員会

理事：永原恵三、増野亜子(継続)、澤田篤子(新)

委員：井上登喜子、山下正美(新)

参事：大久保真利子(継続)、松本民菜(継続)、
安原道子(継続)、横山洸(継続)、渡邊佐恵子、
神野知恵(新)、中川優子(新)

第5回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時:平成28年11月5日(土)16:50~17:30

2. 場所:放送大学東京文京学習センター 多目的講義室1

3. 出席者:340名(委任状提出者183名、書面議決書提出者113名を含む)

〔備考〕正会員596名、定足数298名

4. 議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により塚原康子会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、竹内有一、前原恵美両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

第1号議案 議事事項と審議の経過及び結果

茂手木潔子選考管理委員長より「役員選出資料」【添付書類1】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 平成27(2015)年度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)より「平成27(2015)年度事業報告」【添付書類2-1】【添付書類2-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 平成27(2015)年度収支決算の件

植村幸生理事(経理担当)より「平成27(2015)年度収支計算書」【添付書類3-1】「平成27(2015)年度収支計算書内訳表」【添付書類3-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 平成27(2015)年8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

植村幸生理事により「貸借対照表」【添付書類4-1】、「貸借対照表内訳表」【添付書類4-2】、「正味財産増減計算書」【添付書類4-3】、「正味財産増減計算書内訳表」【添付書類4-4】、「附属明細書」【添付書類4-5】について説明があった。また、公益目的支出計画について順調に進んでいるという報告があった。

続いて、蒲生美津子監事により「監査報告書」【添付書類8】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮った

ところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 2016年8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事より「会員の異動状況(2015年9.1.~2016年8.31)」【添付書類5】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第6号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

その後、遠藤徹理事が「平成28(2016年度)事業計画」【添付書類6】について、次いで植村幸生理事が「平成28(2016)年度収支予算書」【添付書類7】について、それぞれ報告を行った。会員から「田邊尚雄賞授賞式」の名称に関して提案があった。その他、音楽文献目録委員会の吉野雪子委員より、冊子目録を出版しているのは日本だけで、ウェブ掲載事業に関しては大変遅れているがこれには多額の経費が必要という報告があった。

[第5回定時社員総会 添付書類1]

役員選出資料

1. 2016年度役員選挙開票結果

- (1) 有権者数 597名(2016年8月1日現在)
- (2) 被選挙権停止者数 6名
- (3) 被選挙権休止者数 8名
- (4) 投票用紙発送日 2016年8月1日(月)
- (5) 投票締切日 2016年9月1日(木) 必着
- (6) 開票日時 2016年9月6日(火)
午前10時30分より午後7時
- (7) 開票場所 東京藝術大学音楽学部5号館3階5 313室
- (8) 開票に立ち会った会員数 0名
- (9) 投票者数 127名(投票率21.3%)
- (10) 開票結果

総会添付資料の一部は個人情報のため削除しました

①監事

総票数 254票
有効投票数 198票
無効投票数 25票
白票 31

2. 選出過程

① 選出方法

理事・監事の選出については、定款施行細則第3条から第13条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいて行なわれた。

② 監事の選出

9月6日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。

総会添付資料の一部は個人情報のため削除しました

②理事

総票数 1016票
有効投票数 834
無効投票数 97票
白票 85

総会添付資料の一部は個人情報のため削除しました

総会添付資料の一部は個人情報のため削除しました

3. 2016年度役員選任原案

- (1) 監事 2名
蒲生 美津子 小柴 はるみ

(2) 理事 15名

梅田 英春	竹内 有一
遠藤 徹	野川 美穂子
小塩 さとみ	福岡 まどか
ギラン, マット	藤田 隆則
小西 潤子	増野 亜子
小日向 英俊	横井 雅子
澤田 篤子	早稲田 みな子
高松 晃子	

(一社) 東洋音楽学会 2016年度選挙管理委員会

茂手木 潔子 (委員長)
早稲田 みな子 (副委員長)
鎌田 紗弓
神野 知恵
鳥谷部 輝彦

[第5回定時社員総会 添付書類2 1]

平成27年度(2015年度)事業報告

(自平成27年(2015年)9月1日 至平成28年(2016年)8月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2015年10月31日
- ・会場 東京藝術大学
- ・課題「大学における世界音楽の実践」(講演、公開演奏会)

(2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2015年11月1日
- ・会場 東京藝術大学
- ・発表件数34件(共同発表、セッション、パネルディスカッションを含む)

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2016年11月5日、6日
- ・会場 放送大学東京文京学習センター

(4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 5回(第88回～第92回 12・2・4・6・7月)
- ・会場 東京藝術大学ほか
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 5回(第269回～第273回 9・10・3・5・7月)
- ・会場 大阪大学ほか
- ・内容 研究発表、記念講演、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 1回(第65回 3月)
- ・会場 沖縄県立博物館・美術館講堂
- ・内容 研究報告ほか

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第81号の編集、刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第95号(2015年9月)、第96号(2016年1月)、第97号(2016年5月)

- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第39号(2015年11月)、第40号(2016年3月)、第41号(2016年6月)

- ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・第81号(2015年9月)、第82号(2016年1月)、第83号(2016年7月)

- ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

なし

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8) 音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(9) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10) 芸術学関連学会連合への参加

○会員一名を委員として派遣

(11) 東洋学・アジア研究連絡協議会への参加

○オブザーバーとして参加

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(12) 「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

○第32回田邊尚雄賞の授賞

・日時 2015年10月31日

・受賞者および授賞対象

塚田 健一

『アフリカ音楽学の挑戦 伝統と変容の音楽民族誌』

2014年2月28日発行、京都：世界思想社、

ISBN978-4790716174

○第33回田邊尚雄賞の選考と発表

Alison McQueen Tokita (時田 アリソン)

Japanese Singers of Tales

Ten Centuries of Performed Narrative

2015年3月28日発行、イギリス：Ashgate、

ISBN978-0-7546-5379-0

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(13) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

[6] その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

(14) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(15) 独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

(16) 『東洋音楽学会創立80周年記念記録集1 大会篇』の刊行、事務所の資料整理

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

[第5回定時社員総会 添付書類8]

監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会
会長 塚原 康子 殿

平成28年9月23日
(2016年)

監 事 小柴はるみ

監 事 蒲生美津子

私たちは、平成27年9月1日から平成28年8月31日までの平成27年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 平成27年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 公益目的支出計画実施報告書に関して監査を行った結果、正しく実施されていることを認める。
- (4) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上